② 姥揚げの堰

現在の仙南村飯詰字東山本の地域は、奥羽本線の後三年駅を取り巻く、村域屈指の繁華街となっているが、曽て此の辺りは広い柳林に覆われていて、俗に「姥揚げの堰」と呼ばれた農業用水路が、林の中を縫うようにして深く淀んで流れ、夜ともなれば無数の狐火が、岸辺のあちこちに現れ、狐に騙された人の噂なども屢耳にする程の薄気味悪い所だった。また此の堰には「千本ちぐし」と俗に呼ばれた水の揚げ場があり、上手の百姓達によって打ち込まれた何百本にも余る程の杭が立ち並んで、田植え時ともなれば、此の杭に水の留め草を掛けて田圃に水揚げをしたものだった。さて大昔の事、此の「千本ちぐし」の近くに性根の悪い一人の老婆が住んでいて、揚げ場の下手にある自分の田圃に水を引くために、度々此の揚げの留め草をはずすので、常にここら辺りの百姓達の憎まれ者だった。たまたま或る日の事、此の留め草はずしの現場を見咎られた老婆は、遂に百姓達の殴り殺しの責めに遭い、その屍は此の「千本ちぐし」に掛けられ、揚げ場の留め草替わりにされたものと伝えられている。

いとも意味ありげな此の堰の名も此の昔々の恐ろしい出来事によるものとされている。